変貌する産土に想ふ

錦田　剛志

八岐大蛇退治で著名な出雲国斐伊川の畔、出雲平野のただ中に私の奉仕する万九千社、立虫神社は鎮座する。前者はもともと出雲の神在祭の最後に八百万神が参集のうへ、神議・直会されるといふ磐座、神籬の斎場である。後者は江戸時代の初め頃、洪水に伴ひ斐伊川の中州から万九千社境内に遷座された小さき産土社である。中国山地から出雲平野に流れ出た斐伊川は、この辺りで大きく川幅を広げ、さながら大河の表情をうかべる。この土地がかつての氾濫原で、かつまた豊かな稔りを保証する穀倉地帯であり続けたことは、いまもその地形と人家の疎らな田園風景が如実に物語る。社の周辺には美田が連なり近接する住宅は一軒も見あたらない。そんな景色が広がってゐる。

▲　▽

ところが……である。平成十四年春、まもなくこの景観は失はれ、メダカも蛙も螢もその住みかを追はれることになった。社頭の目先、百メートル余りの地には、国の事業による斐伊川を跨ぐ大架橋と国道バイパスの建設工事がはじまる。バイパス予定地の付近

一帯では「豊かな住環境」整備に向けた土地区画整理事業の工事が目下進行中である。

既に神社前を含む周辺の田畑は土砂で埋められ、街路と宅地が網の目のやうに整然と区画されつつある。工事完成後に宅地が完売すれば、約二百世帯の住宅が建ち並び、およそ六百人以上の人口増が見込まれてゐる。現代社会における景観の変貌とは、実に瞬く間に進行するものだ。去年の今頃、瑞々しい早苗が、日光を浴びきらきらと照り輝く水田に麗しく植ゑられてゐたのがまるで嘘のやうだ。生まれてこの方慣れ親しんだ風景との決別にしては、あまりに呆気なく虚しささへ覚えた。

この度の土地区画整理事業は、地権者である住民の構成する組合が事業主体者である。行政側の斡旋、指導、補助に基づくとはいへ、住民すなはち氏子自らが選択した道である。先祖伝来の美田を埋め、田作りの業から手をひくと最終的に判断したのは、他ならぬ私たち氏子自身なのである。議論に議論を重ね、環境保全や景観保全などの美辞麗句では覆ひつくせない苦渋の決断であった。

しかし、もう二度と神社周辺の美しい田園風景を取り戻すことはできないだらう。そして、これから先、約二百世帯が新たに越してくるこの産土に、古き良き村里の心の繋がりを維持、継承することは容易ならざることと思はれる。まして田作りの業を離れた多くの住民に、これまでと変はらぬ神社への崇敬心を無為に伝へていくことは難しいだらう。既に都市化といふ地域の一大変革を遂げたかつて農村の神社は全国に数多あることだらう。当社もその仲間入りをすることになりさうだ。

▲　▽

そんな未曾有の変革期に、私はこれから若き田舎神主として突入する。山積する懸案への不安もあるが、歴代神主が予想だにしなかった経験、試練を神々に与へていただいたと解すれば、これもまた有り難き、生きがひにかなふことではないか。一体この先、何が起こるのやら。混沌の行方を中執持ちとして歩むことになる。鎮守の森の景観を護り、神祭りの姿と心を継承することは言ふまでもない。新たな地域社会、心豊かな共同体を創造する要として当社とその祭りの有する現代的意義は大きい。いやそこに現代神道の果たすべき大きな役割があるのだ。

変はりゆく景色と移りゆく人心に、神々は何を想はれるのだらう。微かに残されてゐる小川の螢光が今年は何故か一段と輝いてゐる。現実と未来を冷静に見つめ、氏子と共に歴史の波に立ち向かひたい。

……

執筆者◇島根・立虫神社万九千社禰宜、皇學館大学神道研究所研究嘱託。昭和四十四年生。島根県立博物館主任学芸員、兼・島根県古代文化センター主任研究員。趣味は出雲神楽、宴会。

にしきだ　つよし　島根・立虫神社万九千社禰宜